中日新聞（2025年6月27日付）

掲載記事は中日新聞社の許諾を得て転載しています。

廻船業 内海船の変容学ぶ

南知多郷土研究会 最後の総会

南知多町などの歴史愛好家らでつくる南知多郷土研究会の総会が26日、町総合体育館であった。会は本年度末での解散を決定しており、最後の総会となった。

会員らの研究報告を掲載する「みなみ」を毎年2回発行し、50年以上にわたり活動してきたが、会員の減少や高齢化などを理由に昨年、解散を決めた。みなみは11月発刊の120号が最終号となる。

会長は、「皆さまのお顔を拝見するのが最後になるのはとても残念。残りの期間もしっかりと事業を進めたい」とあいさつした。

日本福祉大経済学部の曲田浩和教授による、18世紀後半ごろに成立した内海の廻船業に関する講演もあった。

当初の内海船は、大阪と伊勢湾を往復するばかりだったが、尾張藩の米を江戸へ運んだことをきっかけに、瀬戸内と関東をつなぐようになったと指摘。荷主からの運賃で稼ぐ「運賃積み」から、各地で商品を売買して利益を上げる「買積み」の主体へと質が変容していったと解説した。

内海船の講演をする曲田教授＝南知多町総合体育館で

内海船の存在感は大きく、江戸時代後期に江戸城西丸が焼失し再建する際は、木曽の木材を江戸に運ぶ一員でもあったという。

（石井豪）

（許諾番号:20250701-32539）